

学校の共通目標

授業づくり	重点	◦主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ◦生徒一人一人の基礎・基本の定着および学力向上 ◦学習意欲の向上と学習習慣の確立	中間評価	◦協同学習による主体的・対話的な授業展開に取り組んでいるが、今後は深い学びにつなげる工夫改善が必要である。教科によっては学習意欲の向上が必要である。	最終評価	
環境づくり		◦授業規律の徹底と定着、基本的な指導技術の習得、協同学習の充実 ◦授業中の個別指導、反復学習や少人数・習熟度別指導、放課後学習教室によるきめ細やかな指導の充実 ◦生徒の意欲を高める評価や自学自習の意欲を促す課題、取り組みやすい課題の提示		◦概ね授業規律は定着しており、協同学習でも建設的な意見を交わすことができている。 ◦授業中では少人数・習熟度別指導などにより、個別指導や反復学習ができている。 ◦生徒が、基礎的な知識の習得し、関心・意欲を高められるよう教員側の指導技術の向上を図る。		

教科の取組み内容

教科	学習状況の分析（４月）	課 題（４月）	改善のための取組み（４月）	中間評価・追加する取組み（10 月）	最終評価（２月）
国語	調 平成２９年度学力調査による分析 第１学年は基礎学力はあるが、活用に課題が見られた。 第２学年では多くの項目で区の平均を越えたが、全国と比較をすると下回る項目もある。特に作文や漢字の書き取りには課題が残る。 第３学年の区や国の調査結果では、課題であった文学作品の読み取りで力を伸ばすことができた。一方、他の観点に比べて、話す聞くの分野が弱い。	① 第１学年では、身に付いた基礎学力を活用する力を高めることが課題である。 ② 第２学年では、書く学習に重点を置き、書く力を高めることが課題である。 ③ 第３学年の課題であった話す聞く力を向上させることは、第１、２学年でも引き継ぐ。	① 第１学年では思考、判断力を養うために、自分自身の意見を構築し、交わし合う活動を各単元で行う。例えば、意見発表や話し合い、作文などで表現する授業を行う ② 第２学年漢字ノートを継続させ、その意義や効果的なやり方などを示し、さらなる定着を図る。 ③ 第３学年では討論やパネルディスカッションなど話す機会を多く取り入れた授業を工夫する	調 平成３０年度区学力調査結果（平均との比較） 区 関：-1.1, 話聞：+0.7, 書：-0.7, 読：+3.0, 知+1.0 全国 関：-1.0, 話聞：-0.2, 書：+0.4, 読：+6.1, 知+1.4 上記結果より（３年） ほぼ平均値に近い結果であるが、読む能力がさらに伸びてきた。関心も以前より高まっており、知識・理解も定着してきたものと思われる。話す・聞く能力、書く能力は改善してきたが、一層伸ばしていけるよう授業の中で多く機会を取り入れていく。区学力調査結果の四方位分布ではA層が41.6%と多くなっているのは、力を伸ばしている生徒が多いと考えられる。一方、B層が13.0%、C層が23.4%となっており、C層を上げていけるように、基礎の補充を行っていく。	
社会	調 平成２９年度学力調査結果（平均との比較） ３年 関：+5.0、思：+2.2、資：+3.7、知：+9.6 ２年 関：+0.9、思：±0、資：-0.5、知：-0.5 １年 関：+0.3、思：+0.3、資：+1.3、知：-1.4 上記結果より ３年（卒業生）については満足な結果であるが、１・２年（現２年・３年）は全観点で底上げが必要である。関心意欲が高いと、他観点の力も引き上げられることがわかる。	① 基礎、基本の徹底による学力向上。 ② 得られた知識を活用した思考・判断、資料活用の技能の育成。 ③ 関心意欲を高める課題設定や授業展開、資料提示の工夫。	① 授業ごとの評価（プリント等の提出による生徒の自己評価）を行い、次回への意欲を高める声掛けや指導を行う。また、小テストを定期的に行い、学習習慣の定着を目指す。 ② 各種統計や地図、年表からの読み取り、表現し授業の中で共有する形態を定着させる。 ③ 生徒間での学び合い（グループワーク・ペアワークなど）により生徒同士が互いに他の生徒の多面性を理解し、個性を生かした活動を実践する。	調 平成３０年度区学力調査結果（平均との比較） 区 関：+6.1、思：+3.2、資：+4.6、知：+5.3 全国 関：+4.1、思：+1.7、資：+1.1、知：+0.7 上記結果より（３年） 全観点において、区・全国平均を上回る結果であったため、おおむね改善のための取り組みは成果を挙げていると考えられる。しかし、「日本の地域的特色、身近な地域調査、近世の日本の領域」の領域では、全国平均を下回る正答率となっており、生徒が苦手と感じている分野を的確に把握し、苦手解消に向けた補強等の取り組みを行っていきたい。	
数学	調 平成２９年度学力調査結果より平均正答率による分析 現３年 合計 目標値+1.0 区-3.5 全国+0.6 基礎 目標値+0.6 区-3.8 全国+0.2 活用 目標値+2.8 区-2.8 全国+1.8 現２年 合計 目標値+7.9 区+2.9 全国+7.3 基礎 目標値+8.0 区+3.0 全国+7.2 活用 目標値+7.3 区+2.0 全国+7.3 上記結果より、目標値を越えており概ね良好と思われる。 ３学年に対しては区の平均を若干下回っている。 ３学年は無答率が高い問題で41.0% ２学年は無答率が高い問題で29.0%であった。	① 数学においては習熟度に分けて授業を展開するため、平均正答率は比較的高いものの、生徒の学力のばらつきは少ないとは言えない。無答率も10%を超えている。 ② 基礎定着クラスの生徒には基礎計算のスピードアップ、精度アップを目標にし、発展クラスの生徒には深化した問題を与え、より豊かな見方考え方を身に付けさせることを目標にし、全てのクラスでの正答率の向上を目指す。 ③ 教科書の論述問題を扱い、数学的な理解力や表現力を育んでいく。	① 意欲を向上させるために数学の魅力が伝わるような授業を心がける。小テスト、追加問題、補充問題、など既習内容を活用する機会を増やし、自身の力の伸長を測る取り組みを行う。 ② 現在の学習内容が社会生活のどのような場面で、役に立つのかなどを伝えることで、興味の湧く授業展開を工夫する。 ③ 基礎定着クラスにはメソッドの定着を徹底し、正解不正解ではなく、各問題に対して決められたメソッドで解けるように、発展クラスには学習事項の応用力やそこから派生した問題を与え考察力の深化を図る。 ④ 論術問題への取り組みでは、言語活動を活性化させ思考を整理することで数学的思考力を育んでいく。	調 平成３０年度区学力調査結果（平均との比較） 区 関：-0.8、考：+0.3、技：-1.9、知：-4.4 全国 関：+2.9、考：+5.1、技：+1.7、知：-3.2 上記結果より（３年） 見方・考え方の観点において、区、全国の平均値を上回る一方で、知識・理解の観点での平均値が区、全国の平均値よりも下回っていることが本校の顕著な特徴である。これは、生徒の関心が解くことや考えることに偏重した結果であり、今後の指導では解くこと考えることだけではなく、基礎知識の重要性を教える指導が必要である。	
理科	調 平成２９年度学力調査の目標値と結果の比較とその分析 現３年 関：-5.7 思：-5.3 技：-3.0、知：-7.0 全：-5.6 現２年 関：-0.3 思：+1.2 技：-1.0、知：-8.4 全：-4.1 上記結果より現３年生は全体的に低く、知識の低さが目立つ。現２年生は目標値を少々下回るか、思考に関してはプラスになっているが、知識が大きく下回っていることが全体目標を下げている原因である。	① 知識の定着を図る。 ② 実験技能の向上を図る。 ③ 実験データの分析を通じて思考力の向上を図る。	① 知識の定着を図るために、小テストの実施、家庭学習の推奨のための課題とその提出の徹底を図る。 ② 実験実施回数と活動時間を確保し、実験経験を積ませる。さらに、実験を確認しながら、着実にを行い、成功させることを経験させ、その方法を理解し、技能の向上を図る。また経験を積むことで、関心・意欲の育成にも繋げる。 ③ 実験データを分析するときの観点を指示し、考察の難型を指示しながら、自分の言葉で表現せることで、思考力・表現力の向上を図る。	調 平成３０都生徒学力向上を図るための調査：平均との差都 関：+3.2、考：+1.3、技：+3.1、知：+7.9（２年） 調 平成３０年度区学力調査結果：平均との比較（３年） 区 関：-4.7、考：-6.3、技：-10.7、知：-4.6 全国 関：-8.9、考：-11.2、技：-13.5、知：-10.1 第２学年は全観点平均を上回っているが、思考・表現については高くない。今年度は考察の書き方などを意識し、指導してきた。引き続き行っていく。 第３年学年は各観点の開きは大きい。行ってきた反復的な学習を続けるとともに、実験を通じて、体験的学習を増やし、関心意欲を高めることで、全体の底上げを図っていく。	

英語	調 平成29年度学力調査の結果分析 3学年は全国平均、区の平均を上回っており、設定されている目標値も全項目において基準を十分に満たしている。全国的に正答率が低い記述問題であっても良い結果を残している。 2学年は観点によっては都の平均を超えていたが総合的には下回った。全体の底上げを図る。 平成29年度に少人数授業に関するアンケートを実施したところ、合同授業よりも少人数授業のほうが学習をしやすいという生徒が大多数を占めていた。	① 聞く、話す、読む、書くとバランスの取れた段階を踏んで外国語表現の能力に課題がある。 ② コミュニケーションへの関心・意欲・態度に課題がある。 ③ 個々に応じた適切な指導を行うことが課題である。	① デジタル教科書の音声やビクチャーカードを用い、生徒間の英語でのやりとりをする活動を積極的に取り入、段階的に言語活動の定着を図る。 ② クラスごとの習熟度に適した授業づくりを行うと共に、ウォームアップなどで生徒間の活動が活発に行われるよう工夫していく。また、パートナーを積極的に変えることにより多くの人とコミュニケーションを取る機会を作り、意欲的な態度を育む。 ③ 基礎クラスは、既習事項の復習や反復学習を取り入れ、基本的な知識の定着を図る。発展クラスは、学習内容を深め、幅広い表現を学んでいく。	調 平成30年度区学力調査結果（平均との比較） 区 関：+5.0, 表：+9.1, 理：+4.4, 知：+5.4 全国 関：+13.8, 表：+18.6, 理：+11.9, 知：+10.5 各項目で平均よりも高い数値を示しているが、外国語理解の能力の分野を見るとまだ伸びる余地がある と考える。リスニングの能力を、ICT 機器を用いて向上させる。また読解の能力を少人数授業により細やかな指導をする。 外国語表現の能力においては少人数指導での一人ひとりが参加できる授業でその成果を表している と考える。	
	調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況	学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況	※分量は2ページ以上となってもよい。		